

平成 22 年 6 月 10 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520089

研究課題名（和文） 視覚表象における「アクチュアル」の研究

研究課題名（英文） A Study of the <Actual> in Visual Representation

研究代表者

阿部 宏慈（ABE KOJI）

山形大学・人文学部・教授

研究者番号：10167934

研究成果の概要（和文）：視覚表象の分析における<アクチュアル>概念の理論的・実践的射程を、映画、写真、マンガなどの具体的な事例にもとづいてあきらかにした。

研究成果の概要（英文）：This study clarified the theoretical and practical range of the notion of the <Actual> in the analysis of visual representation, on the basis of specific cases of cinema, photography and comics.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学（含芸術諸学）

キーワード：表象、映画、絵画、写真、マンガ

1. 研究開始当初の背景

本研究は、平成16年度から18年度にかけて科学研究費助成金を受けておこなわれた「視覚表象における「リアル」の研究」の成果をふまえ、さらに現代的なメディアのありかたや、90年代以降のあらたな理論的展開を見据えて、発展的に研究を深化しようとするものとして開始した。

「リアル」の概念は「真理」や「真実性」といった概念と密接な関係にあって、「崇高」や「表象不可能性」といった問題系との関わりにおいて論議された。時にはそれはリオタ

ールのポスト・モダン論争の理論的発展に基づくものであり、時にはジジェク派におけるようにラカンのいわゆる「想像界」に対立する概念としての「現実界」としての「リアル」として問題化された。

しかし、世紀の転換期における急激なグローバル化とITメディアの進展は、これらの西洋思想の根底における脱＝構築的な読解をいわば映像的事実として突きつけるかのように、リアルタイムにおける現実の再現表象という問題を、切実な課題として提示するに至った。それによって視覚表象の

分析研究は、しばしば実践的なメディア・スタディーズやカルチュラル・スタディーズによってとって代われようとしている。けれども、それらの実践的な研究でさえ、われわれが「リアル」の研究で明らかにしたような記号学の限界とそれを越えようとする理論的な探究なくしては、きわめて不十分なものとなる。それらの展開は言わば表象論的な転回なくしては空虚なものにとどまるであろう。

このような観点から本研究では、古くはダヴィッドの「ナポレオンの戴冠」やジェリコー「メデューズ号の筏」に見られるようなメディアの側面を有する絵画芸術から、9・11の世界貿易センタービル崩壊のイメージのように世界中に同時配信される映像の問題にまでひろくかかわる問題系を扱うものとなった。すなわち、より「事実性」あるいは「現在性」といった問題に結びつく「アクチュアル」という概念を中心的課題として据え、映画、写真、絵画、マンガといった視覚表象におけるもうひとつの「リアル」の問題を、理論的、歴史的かつ作品論的に探究するものである。

2. 研究の目的

そのために、一方では、グッドマンやウォルトンといった理論家によるミメシス批判的な議論や、ディディ＝ユベルマン、ジャン＝リュック・ナンシーといったポスト構造主義以降の理論的展開を総括しつつ、カルチュラル・スタディーズやメディア・スタディーズの近年の成果をふまえた個別論を探究する必要がある。また、その一方で、現実の事件に取材しつつドキュメンタリー的なフィクション映画という一見すると矛盾を孕んだ実験的作品行為を志向しようとする是枝裕和や、かつての社会的なアンガージュマンとは別のかたちでの世界との直接的な関わりを志向しようとするドキュメンタリー映画作家たちをとりあげることによって、デジタル時代のメディアと「アクチュアル」の美学の問題点を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、平成8年度に開設され18年には比較文化論・表象文化論コースとして拡充された山形大学人文学部表象文化論コースのスタッフと、哲学・思想・批評理論を専門とする研究者との共同研究として実施された。

具体的な視覚表象（特に映画や写真あるいはマンガ）を研究する研究者と、美学や哲学と美術史を専門とする研究者が情報を提供

し合い、理論的探究と具体的作品分析を相互的に検証することによって、従来の個別領域での研究において時に露呈しがちであった限界を超えて、理論的考察と実践的分析の融合を目指すものとなった。

4. 研究成果

平成19年度は、本研究課題の第一年次にあたり、特に三年間の研究の基盤となるべき文献資料および映像資料の収集につとめ、それぞれの分担領域における研究を進めた。阿部宏慈は、本研究に先立つ「リアル」の研究の成果を報告書にまとめるとともに、10月開催の山形国際ドキュメンタリー映画祭および平成20年2月開催の北アイルランド映画祭に参加し、ドキュメンタリー映画作家やプロデューサーと対談、討議をおこない、ドキュメンタリー映画における「アクチュアル」の問題の研究を進めた。また10月の本科研費研究会では「リアルからアクチュアルへ」と題して、12月には岩手大学文学理論研究会において「ディディ＝ユベルマンと表象不可能性の問題をめぐって」と題して発表をおこなった。中村三春は、「意味から強度へ」のテーマに基づき、表象におけるアクチュアルな要素の追究を、日本文学を原作とする映画作品の分析によって推進した。大河内昌は現代ロマン主義批評における政治性の問題を研究した。清塚邦彦は、K・L・ウォルトンの写真論を手がかりにしながら、写真画像の虚構性と現実性に関する検討を行い、日本記号学会において研究発表を行った。また、それと並行して、現代の分析哲学における虚構概念に関する一連の先行研究について、包括的な検討作業を行った。阿部成樹は革命期の美術を中心に、身体表象と政治の問題を考究した。中村唯史は日本のマンガおよび近現代の演劇に関する文献・視聴覚資料を収集し、特に後者について基礎的な考察を試みた。3月19日には、本年度の総括のための研究会を開催し、本年度の研究成果について意見交換をおこなうとともに、第二年度の研究計画の策定をおこなった。

平成20年度は、前年度に収集した資料にもとづき研究を継続した。まず年度初めの4月には今年度の研究を進めるための研究会を開催し、中村唯史が演劇における「アクチュアル」の問題をめぐって発表をおこない、議論を深めた。阿部宏慈は研究代表者として全体の統括をおこなうとともに、ドキュメンタリー映画における「アクチュアル」の問題を研究するため、4月にニヨン（スイス）でおこなわれた国際ドキュメンタリー映画祭に参加し、作品の資料を収集し、各地の映画祭のディレクター、映画作家、研究者等と討

議をおこなった。大河内昌は「崇高」美学の問題と「アクチュアリティー」の関係についての理論的研究をすすめ、ジェーン・オースティンに関する研究においてさらにそれを展開した。清塚邦彦は、写真的なリアリティーとアクチュアリティーの問題を、視覚表象における「虚構性」の問題系との関係において研究を進めた。阿部成樹は、絵画におけるアクチュアリティーと身体性の問題の研究を進めるとともに、1920年代から30年代フランスにおける美術史と批評の問題の検討をさらに進めた。中村三春は日本映画と文学作品との比較研究によって「アクチュアル」の問題をさぐり、特にロマン・ロランの第一次世界大戦時の作品を映画化した今井正の「また逢う日まで」が持ちえたアクチュアリティーに関する研究を1月の研究会での議論に付し、研究の深化に貢献した。阿部宏慈は本研究の成果を活かして山形国際ドキュメンタリー映画祭の運営に関し積極的に関与するとともに、東北大学における「ナラティブ・メディア研究会」でゲスト・スピーカーとして成果を発表した。

平成21年度は研究の最終年度にあたり、前年度に収集した資料にもとづき研究を継続した。まず年度当初に、本年度の研究計画を確認し、それぞれの分担領域において前年度に引き続いて研究をおこなった。阿部宏慈は研究代表者として全体の統括をおこなうとともに、ドキュメンタリー映画における「アクチュアル」の問題を研究をすすめ、山形国際ドキュメンタリー映画祭の国際ナショナル・コンペティション部門の審査をはじめ、各種の企画の運営などにかかわった。また、京都大学附属博物館で開催された科学映像をめぐる研究シンポジウムに参加し、ドキュメンタリー映画祭での研究成果の一部を発表した。清塚邦彦は、昨年度は分析哲学の立場からする一連のフィクション論について理論的な総括を行うことで、視覚表象のアクチュアリティーを考えるための枠組みの整備を行った。その上で、これまでの研究成果とあわせて著書を刊行した。阿部成樹は、絵画におけるアクチュアリティーと身体性の問題の研究を進めるとともに、1920年代から30年代フランスにおける美術史と批評の問題の検討をさらに進めた。中村唯史は、演劇とマンガにおけるアクチュアリティーの問題の研究をさらにすすめた。中村三春は有島武郎・宮澤賢治・横光利一などの小説テキストを、その内部における表現様式や映像性などの観点から追究し、あわせて同時代の諸媒体との関わりにおいて「アクチュアル」の点から解明した。これらの研究成果の一部を平成22年度の人文学部大学院文化システム研究科研究紀要などで公開の予定である。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

- [雑誌論文](計19件)
- 1 阿部成樹「「フォションとクローバー：美術史と人類学のもうひとつの接点について」『日仏美術学会会報』査読有、29号、2010(印刷中)
 - 2 中村三春「旅行中の言葉 Words on Travels リービ英雄と多和田葉子」「層」査読無、第3号、2010年1月、195-209
 - 3 中村三春「かばん語の神 宮澤賢治のノンセンス様式再考」「賢治研究」査読無、第108号、2009年12月、21-35
 - 4 大河内昌「崇高美学の楽しみ」『日本ジョンソン協会年報』査読無、第32号、2009年5月、6-9
 - 5 阿部宏慈「引き裂かれたスクリーン：映像のリアリティーとアクチュアリティーをめぐる若干の考察」「ナラティブ・メディア研究会活動報告書 2008年度」査読無、巻号無、2009年3月、19-37.
 - 6 中村唯史「誰のものでもない視点は可能か：マンガにおける描き分けの基準をめぐる」『ナラティブ・メディア研究会活動報告書 2008年度』査読無、巻号無、2009年3月、3-17
 - 7 大河内昌「商業社会における「英雄的主題」『序曲』におけるワーズワスの記憶術」査読有、第85巻、2008年11月、43-58
 - 8 大河内昌「家庭小説とゴシック小説 オースティンはラドクリフの何を恐れたのか」『ジェーン・オースティン研究』査読無、第二号、2008年5月、125-130
 - 9 中村唯史「帝国と詩人：「ソ連多民族文化」とダゲスタンのアヴァール語作家ラスル・ガムザトフ」『講座スラブ・ユーラシア学3：ユーラシア・帝国の大陸(講談社)』査読有、第3巻、2008、106-136
 - 10 中村三春「永遠の遅延・ガラス越しのkiss 『また逢う日まで』のメロドラマ原理」『國文學解釈と教材の研究』査読無、53-27、2008、42-51
 - 11 中村三春「「葉」評釈(三) パラドックスとメタフィクション」『太宰治研究』査読無、16、2008、190-211
 - 12 清塚邦彦「ウォルトンの写真論をめぐる ii 演じることと見ること」『新記号論叢書5 写真、その語りにくさを超えて』査読無、第5巻、2008年5月、61-67
 - 13 阿部成樹「追悼の政治 ジャック＝ルイ・ダヴィッド《マラーの死》について」『表象』表象文化論学会編、査読有、第2号、2008年3月、190-208
 - 14 中村三春「モダニスト久野豊彦の様式

意味から強度へ」『山形大学人文学部研究年報』査読有、第5号、2008年2月、1-25
15 中村三春「森敦『われ逝くものごとく』の構造」『山形大学紀要(人文科学)』査読有、第16巻第3号、2008年2月、pp.1-23
16 阿部成樹「手仕事と個 オクタヴ・タッセルのアトリエ図」『西洋美術研究』査読有、第13号、2007年7月、73-92
17 中村三春「「葉」評釈(二) アイロニーとフィクション」『太宰治研究』査読無、15、2007年6月、172-187
18 清塚邦彦「写真とメディア：K・L・ウォルトンの写真論を手がかりに」『東北哲学学会年報』査読有、第23巻、2007年5月、81-92
19 清塚邦彦「外部主義と反還元主義：デイヴィッドソン解説」D・デイヴィッドソン『主観的、間主観的、客観的』査読無、巻号無、2007年4月340-369

〔学会発表〕(計12件)

- 1 清塚邦彦「『フィクションの哲学』合評会」慶応義塾大学グローバルCOE主催ワークショップ、2010年3月27日(慶応義塾大学)
- 2 清塚邦彦「『フィクションの哲学』合評会」第32回 現象学を語る会、2010年2月20日(東北大学)
- 3 阿部成樹「フォションと歴史」日仏美術学会ワークショップ「1920-30年代の美術史家と美術批評家 フランス美術史編纂の歴史研究試論2」、2009年12月19日(日仏会館)
- 4 阿部宏慈「映画・映像祭、映像番組と大学の今後」京都大学総合博物館学術映像博2009における特集シンポジウムでのパネルディスカッション、2009年10月25日(京都大学総合博物館)
- 5 清塚邦彦「分析美学の現在」哲学若手研究者フォーラム 2009年度テーマレクチャー、2009年7月18日(国立オリンピック記念青少年総合センター)
- 6 中村三春「レトリカル・モダニズム 久野豊彦と横光利一」第8回横光利一文学会大会、2009年3月15日(愛知淑徳大学)
- 7 中村三春「根元的互換 研究理論の更新のために」国際ワークショップ「理論の互換・交換は可能か」、2008年12月12日(立命館大学国際文化研究所)
- 8 中村唯史「

」 In search of the Caucasian Culture: Seeking New Perspectives through Dialogues between Philologists and Historians、2008年1月30日(京都大学)

- 9 中村三春「久野豊彦とダグラス経済学」日

本比較文学会東北大会、2007年12月1日(山形テルサ)

- 10 中村三春「モダニスト久野豊彦の様式」様式史研究会2007年9月17日(山形大学)
- 11 中村唯史「ソヴィエト連邦におけるコーカサス諸民族文学の位相」国際文化交流基金異文化講座「文明の十字路・コーカサスの諸相」、2007年7月30日(ジャパンファウンデーション国際会議場)
- 12 清塚邦彦「写真のリアリティと演技的な態度」日本記号学会第27回大会、2007年5月13日(山形県立米沢女子短期大学)

〔図書〕(計2件)

- 1 清塚邦彦「飯田隆ほか編 岩波講座哲学 03 言語 / 思考の哲学」岩波書店 / 2009 / 171-188「虚構論」、282-285「テキストからの展望」を担当
- 2 清塚邦彦「フィクションの哲学」勁草書房 2009 / 274 ページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

阿部 宏慈 (ABE KOJI)
山形大学・人文学部・教授
研究者番号：10167934

(2) 研究分担者

清塚 邦彦 (KIYOZUKA KUNIHICO)
山形大学・人文学部・教授
研究者番号：40292396
阿部 成樹 (ABE SHIGEKI)
山形大学・人文学部・教授
研究者番号：90270800
中村 唯史 (NAKAMURA TADASHI)
山形大学・人文学部・准教授
研究者番号：20250962
中村 三春 (NAKAMURA MIHARU)
北海道大学・文学部・教授
研究者番号：80164341

(3) 連携研究者

大河内 昌 (OKOCHI SHO)
東北大学・文学部・教授
研究者番号：60194114